

[集団づくり]

1 多様な子どもたちと 学校教育相談

会沢信彦

1. 学校の中の多様な子どもたち

近年、社会の中で、多様性やダイバーシティという言葉聞く機会が増えてきました。最近では、「ダイバーシティ&インクルージョン（D&I）」の推進を謳う企業も増えているようです。企業にとっては、社員の多様性を前提とし、それを積極的に活用していくという姿勢がなければ、もはや生き残ることはできないという危機感の表れなのでしょう。

言うまでもなく、学校にも多様な子どもたちが存在します。一例を挙げれば、以下のような子どもたちです。

- ・外国にルーツのある子ども
- ・障害のある子ども
- ・発達的な（いわゆる）「特性」のある子ども
- ・健康問題を抱える子ども
- ・性的マイノリティの子ども
- ・貧困など、困難な家庭環境にある子ども
- ・いわゆるヤングケアラー
- ・家庭以外（児童養護施設など）から通学する子ども

私たちはしばしば、「普通は…」 「普通じゃない」と口にします。しかし、「普通の子ども」というのは私たちの幻想であり、実はそもそも「普通の子ども」など存在していないのかもしれない。

なお、『生徒指導提要』（改訂版）では、第13章「多様な背景を持つ児童生徒への生徒指導」を中心に、学校の中の多様な子どもたちについて詳しく取り上げています（文部科学省、2022）。ここでは以下に、多様な背景をもつ子どもについての第12章と第13章の節見出しを紹介するにとどめますが、学校教育相談に携わる者にとっては必読の内容です。

- ・12.4 「性的マイノリティ」に関する課題と対応

- ・13.1 発達障害に関する理解と対応
- ・13.2 精神疾患に関する理解と対応
- ・13.3 健康課題に関する理解と対応
- ・13.4 支援を要する家庭状況

2. 多様な子どもたちを理解する視点

『生徒指導提要』には、アセスメントの方法として「生物・心理・社会モデル（BPSモデル）」が紹介されています。筆者は、このモデルに従い、学校において多様な子どもたちを理解する視点も以下の3つがあると考えています。

(1) 理解の視点①：生物モデル——ニューロダイバーシティ

まず、生物学的側面として、ニューロダイバーシティを挙げたいと思います。近年、脳・神経科学の立場からも、「そもそも人は脳・神経のレベルから異なる存在である」ことが明らかになりつつあります。村中（2020）は、『あらゆる面において神経学的多数派』な人など存在しないと述べています。そして、「ただそこにある特徴」にしかすぎない脳や神経の違いが、環境との相互作用の中で価値づけされ、「障害」にも「個性」にも「才能」にもなり得るのだと指摘しています。

(2) 理解の視点②：心理モデル——スキーマ

ご承知のとおり、近年のカウンセリング理論の主流は、認知行動療法です。さまざまな悩みや困難の背景として、個人の「認知」に焦点を当てようとします。この場合の「認知」は、学び方の違いを説明する際に用いられる「認知特性」という概念よりも広い、「世界や自分自身に対するものの見方、考え方」とでもいうべきものだと思います。認知行動療法では、特に深いレベルの信念や思い込みを「スキーマ」と呼んでいます。ちなみに、交流分析における「人生脚本」、アドラー心理学における「ライフスタイル」は、ほぼ同様のものを指していると筆者は理解しています。

筆者は、スキーマを、すべての人が脳にかけているサングラスのようなものだと考えています。人は皆、そのサングラスを通して、世の中（他者）や自分自身を理解しています。アドラー心理学では、ライフスタイルは、5～10歳くらいに固まると考えられていますが、ニューロダイバーシティの観点をふまえれば、もともともっている脳・神経の違いの要素も少なくないと思われます。

さて、一人一人、サングラスの色と色の濃さは異なります。したがって、自分とまったく同じものの見方をする人は存在しません。しかし、ほとんどの人は、色は異なっても、基本的には色の薄いサングラスをかけています。だから、「あな

たはそう考えるのね。私とは違う見方ではあるけれど、あなたの考えも理解できるわ」と、お互いを理解しあえるのです。

しかし、世の中には、何らかの理由で色の濃いサングラスをかけている人がいます。小さい頃から真っ赤なサングラスをかけている人は、真っ赤な世界や人生しか知りません。比較的薄い色のサングラスをかけている多くの人は、その人を理解することができません。「変わった人ね」「変な人だわ」と、その人から遠ざかろうとします。しかし、その人の立場になってみるとどうでしょう。幼い頃から、「誰も自分のことを理解してくれない」「世の中はみんな自分の敵なのだ」と感じてもおかしくはありません。

なお、認知行動療法の発展型であるスキーマ療法では、色の濃いサングラスを「早期不適応的スキーマ」と呼んでいます（伊藤、2013）。

(3) 理解の視点③：社会モデル——学校に福祉の視点を

現在、子どもの貧困が社会問題となり、子ども食堂など、課題解決に向けたさまざまな取り組みが行われています。また、増加の一途をたどる児童虐待についても目を背けることはできません。しかし、学校においては、どこか、「経済的にもある程度余裕があり、親が愛情を注いで子どもを育てる家庭」を「普通」と考えてしまう部分はないでしょうか。

中央教育審議会の「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」（文部科学省、2021）では、学校教育の役割が以下の3点であることを明確に指摘しています。

①学習機会と学力の保障

②全人的な発達・成長の保障

③身体的、精神的な健康の保障（安全・安心につながるができる居場所・セーフティネット／福祉的な役割）

そして、特に②と③こそが「日本型学校教育の強み」と述べています。学校教育の中核は授業であり、①が学校教育の中心であることは言うまでもありません。一方、特別活動などを中心に、②についてもわが国の学校が力を注いできた部分だと言えます。

筆者は、学校の役割として③をはっきりと打ち出したことが、この答申の最大の意義だと考えています。学校は、授業において子どもたちの学習機会と学力を保障し、学校生活全体を通して子どもたちの全人的な発達・成長の保障を行う前提として、「子どもの身体的、精神的な健康を保障」し、「安全・安心につながるができる居場所・セーフティネット」でなければなりません。これらは、従来、福祉の領域で重視されてきた考え方です。筆者は、多様な子どもたちを理解する

ためには、学校には今後さらに福祉的な視点が必要であり、それを担うのは学校教育相談にほかならないと確信しています。

3. 私たちにできること① まずは身近な自他理解から

多様性は、「自分は同性が好きかも」と悩むAさんや、外国からやってきてまったく日本語がわからないBさんだけの話ではありません。クラスの子どもたち、職員室の同僚、そして自分自身こそが、多様な存在なのです。したがって、まずはクラスの子どもたち、職員室の同僚、そして何より自分自身をよりよく理解することこそが、多様性を活かした学級、学校をつくるための第一歩となるはずす。

身近な他者や自分自身を理解するために必要なこと、それは、学校教育相談を学び、実践することにほかなりません。「治そうとするな、わかろうとせよ」(國分、1979)の姿勢のもと、他者と自分自身の心の声に十分に耳を傾けることがその第一歩です。

4. 私たちにできること② 職員室に多様性を

多様な子どもたちを理解するためには、教職員集団も多様でなければなりません。ある中学校の校長先生のエピソードです(青木、2018)。初任の女性教員は、生徒から「オロオロ先生」とあだ名が付くくらい自信がなさそうに見え、校長として大変心配していました。しかし、あるとき校内を巡回していると、別室から笑い声が聞こえます。そつとのぞいてみると、普段は笑い声など聞いたこともない、緘黙の生徒とおとなしい不登校気味の生徒が、オロオロ先生と談笑していたのです。校長先生は、「オロオロ先生を指導しようとしていた自分が間違っていた。彼女は、彼女のままで、十分この学校に必要な存在なのだ」と気づかれたそうです。

教師一人一人の多様性(=持ち味)が十分に活かせる教職員集団でありたいものです。

〈参考文献〉

青木一(2018)『「オロオロ先生」に学ぶ』『月刊教職研修』9月号

伊藤絵美編著(2013)『スキーマ療法入門』星和書店

國分康孝(1979)『カウンセリングの技法』誠信書房

文部科学省(2021)『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)』

文部科学省(2022)『生徒指導提要』

村中直人(2020)『ニューロダイバーシティの教科書』金子書房